2019年横浜ナザレン教会聖霊降臨節第十七主日礼拝説教
「神の国は来ているのだ」ルカ11:14～23

【聖書箇所】

ルカ 11:14 イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆した。15 しかし、中には、「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言う者や、16 イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた。17 しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「内輪で争えば、どんな国でも荒れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。18 あなたたちは、わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその国は成り立って行くだろうか。19 わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。20 しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。21 強い人が武装して自分の屋敷を守っているときには、その持ち物は安全である。22 しかし、もっと強い者が襲って来てこの人に勝つと、頼みの武具をすべて奪い取り、分捕り品を分配する。23 わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。」

1 物事の本質

私の尊敬する説教者がよく語る言葉があります。「目に見える表面的な現象とその奥にある本質的なものがある。本質を掴まなければ物事は分かったことにはならない。」今日の聖書箇所もそうです。主イエスが悪霊を追い出していると、それに対して誹謗中傷する人達がいたので、主が反論されたというのが目に見える現象です。これを表面的に読めば、私達とは何の関係もない2000年前の昔話。ですが本当にこのお話しは私達と何の関係もないでしょうか。いえ、ここに出て来るのは私達の話です。ここには、「主イエスの救いとはどういうものか？」が描かれているからです。私達に働きかける現実の救いの出来事が描かれています。それを共に見ていきたいと思えます。

2 悪霊

「口を利けなくする悪霊」を主イエスは追い出しておられました。2000年前の古代世界では、様々な病気は悪霊の仕業と考えられていたようです。医学が発達した現代世界では、口が利けない人に悪霊が憑いているとは考えません。しかし、私達現代人が悪霊－悪いものから全く自由に解放されて生きているか？というところではないことは明らかです。自分自身のことを考えて

も、自分の周りの人達のことを考えてみても、何かの力に縛られて生きているように思えます。皆さんもご自身の生活を考えてみれば、様々なものに囚われている自分に気づかれるのではないのでしょうか。何故自分はこんな事をしているのだろうか、どうして自分はこんな事を考えてしまうのだろうか、そういう自分を嘆く事も多いのではないのでしょうか。人を憎む不自由さ、人を裁いてしまう不自由さを選んでしまう、そこから抜けられない苦しい経験をした人は多いでしょう。自分自身が自由に選んで、愛と義に生きている…とはとても言えない、自分の罪に、他の人の罪に、そして社会の罪に苦しみつつ生きざるを得ません。

目に見える現象はそれぞれ、様々な囚われ方があります。しかし、その奥にある本質的な事は、自分の存在を、自分の命、人の命を無条件に喜ぶことができなくなっている事ではないのでしょうか。それは、私達一人一人の命を無条件に喜び、受け止めてくださる創造主なる神、父なる神を見失っているからです。このように、私達を神から引き離す目に見えない力を聖書では「悪霊」と呼んでいます。悪霊は私達には非常に身近な存在です。私達は主イエスを信じているのですが、時には悪霊の力によって、父なる神に対して目が閉ざされ、耳が閉ざされてしまう事もあります。そうになると、祈ることをしなくなり、自分を神として生きようとしみます。神に対して「口が利けなくなる」のです。そして、自己中心という悪霊に乗っ取られている事に気づきさえせず、滅びの道を歩んでいます。

その悪霊の力から私達を解き放ってくださり、神のもとへと連れ帰ってくださるのが救い主であるイエス・キリストです。命をかけて連れ帰ってくださる救い主です。主が私達を神の御前で口が利けるようにしてくださるのです。祈ること、賛美すること、感謝することができるようにしていただきます。

3 不信仰

ですが、私達、そのことを信じ切ることができないのです。そのキリストこそ、私を破滅の道に引き込もうとするのではないか？ そんなふうにしてしまう。ひどく傷つけられて憎しみに囚われそうになった時、主イエスの「敵を愛しなさい」という言葉を思い出さないクリスチャンはいないでしょう。また、この教えに従って敵を愛した人々の事をも思い出す。しかし、思い出したうえで私達は考える。「敵を愛したら、こちらが滅ぶ。敵なんて愛せるわけない。敵を憎んで当たり前だ。“敵を赦し愛した”なんて言うやつは、嘘つきだ、偽善者だ」と。主なる神に祈るのではなくて、主イエスに背を向け、敵を愛する神の愛を証する人々を偽り者としてしまう。敵を赦せない自分を自己正当化する為に。

今日のテキストにもそんな私達の姿が描かれています。15節「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している。」主イエスの力と言葉を否定します。また別の人は、天からのしるしを求めた…とあります。「あなたがして

いることは天のみ神の御業であるという証明書を見せることができるか？」というのです。このように、主イエスは誹謗中傷する人々や天からの徴を求める人々に囲まれていました。

そして、福音書記者ルカは、主イエスは彼らの心を見抜かれた…と語ります。人々の心を見抜いた主イエス。彼らの心の中に、私達の心の中にあるものを見た主イエスは、どんなに深く悲しんでおられたでしょうか。神の救い主の力を見分けることができない鈍さ、愚かさ、自己正当化の醜さ。目の前で父なる神に生かされる喜びを取り戻した人がいるのに！結局、この私達人間の神の出来事を見分ける事ができない鈍さ、愚かさ、醜さが、イエスさまを十字架につけてしまいます。私達の為に差し出された神の独り子を十字架の上に無残に殺すのです。恐ろしいことです。ある人がこう祈りました。「自分の目が他のどんな事に対してかすんでしまっても、主の御業に対しては澄んだ目でいられるように」。私達も、主イエスの事については、はっきりと見る事ができるようにと願わずにはられません。

4 主イエスの反論

主イエスのご自身への誹謗中傷に理路整然と反論します。まず、サタンが内輪もめをする筈がない…と仰います。サタンというのは悪霊の頭、王様のことで、ベルゼブルと同じ意味です。国で内輪もめすれば、その国は亡びる…尤もなことです。戦国時代、相手の国にスパイを送り込み内部分裂させて、裏切らせ、戦わずして勝利するという戦略は豊臣秀吉や徳川家康、戦上手の武将たちがよく使う手法でした。ですが、サタンはそんな策略に乗る程に愚かではありません。それは今もサタンの国は滅びていない事からも明らかです。そうであれば、主イエスの業はサタンの国の内輪もめではない事は明らかです。

そして、更に続けます。「わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。」先程、古代世界では、病気は悪霊の仕業だと考えられていたと言いましたが、病を癒す為に悪霊祓いをする人達がいたようです。主イエスも悪霊を追い払って病を癒すという点では似ています。主に対して「ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と誹謗中傷した人々の仲間にも悪霊祓いをしていた人たちがいたのでしょうか。「あなた達の仲間の悪霊祓いは、いったい何の力で追い出しているのか？私がそうなら、あなた達の仲間もベルゼブルの力で追い出しているという事にならないか。そうであれば、あなた達は仲間を誹謗中傷する事なり、仲間から告発され審かれる事になる」。主は見事な論理を展開されます。

5 神の国は来ているのだ

そして「だが、考えてみなさい」と促すかのように主イエスは力強く続けます。「しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」(20節)。驚くべき断言です。神の国、神の支配は既にあなたがたの所へ来ている、神をもはや天に求める必要はないのです。死んだ後の世界に求める必要もありません、あなたがたが今ここに生きているその地に、既に神の国は来ている。あなた方の中で実現した神のご支配を受け入れ、信じればよい、主イエスはそう言われます。この「神の国はあなたたちのところに来ているのだ」という部分がある人は、このように訳したそうです。「神の国は、あなたがたの手の届くところまで来ている」。

6 神の指

さて、ここで主イエスは「神の指」という印象深い言葉を使っておられます。明らかにこれは、出エジプト記第八章の記事に出て来る言葉です。モーセとアロンが、エジプトで奴隷として迫害されて苦しみ呻く民を救い出すために、エジプトのファラオと、そしてファラオの魔術師と戦い、自分達の神がまことの神として現実に生きて働いておられることを証し、奇跡が起こります。魔術師たちは、神の指が今ここに働いているという事を認めざるを得ません。しかしファラオの心は依然として頑なでした。「魔術師はファラオに、『これは神の指の働きでございます』と言ったが、ファラオの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞かなかった。主が仰せになったとおりでである。」(出エジプト8:15)。ファラオは、神の指が自分のすぐ側に働いたのに、心を動かそうとはせず、信仰の手を出そうとしなかったのです。

7 神の国に手をのばす

ですから、「神の国は、あなたがたの手の届くところまで来ている」という翻訳、これは主イエスの御心をよく読み取っている翻訳だと言われています。主イエスは23節で「わたしに味方しない者はわたしに敵対する」と言われたからです。これだけ聞くと裁きの言葉に聞こえます。しかし、十字架と復活の主が仰った言葉です。十字架の上で苦しみつつも罪人を招いたお方が語る言葉だから、自分に味方しない者を裁く言葉ではありません。主は、「私の味方をしてくれ！」と仰っているのです。私と共に集めて欲しい、私と一緒に働いて欲しい…と招いておられる、頼んでおられる、こっちへ来なさいと声をかけて下さっている、「私の方に手を出しなさい」と言われているのです。

私達が教会で繰り返し教えられること、それは信じるということ、救われるということは、全く一方的な神の御業だという事です。信じることそれ自体が、私の業ではなく、神の業だという事を何度も繰り返し聴きます。信仰は自力で持つものではない、与えられるもの。それはととてもとても大切な事です。けれども、

信じ、救われることが全く神の御業であるという事は、私達が神のロボットになることではありません。神はそのようなことを望んではおられません。私達が救われる時、「神の指」は確かに働きます。「しかし、そこで私達は神の指人形になるわけではない」と言った牧師がいます。その通りだと思います。指人形の中はからっぽ、神はその中に指を突っ込んで動かすだけ、人形は動かされるままです。そのように、私達は魂を抜かれコントロールされるわけではないのです。ではどういう事なのか。「わたしに味方しない者」とは、「私と共にいない者」と訳せる言葉です。主は、神の指の働くところで、寧ろ、一緒に働こう！と呼びかけておられるのです。主イエスを信じて救われるというのは、このように神の指をもって悪霊と戦って勝利する主の御業を、主と共に戦い、主と共に担うということなのです。具体的にはどういう事でしょうか。今日の箇所少し先にこうあります。「幸いなのは、神の言葉を聴き、それを守る人である。」

8 私達の選択

この招きに答えて、神の国に手をのばすか否か、それは私達の選択に任されています。神は私達に自由を与えてくださるのです。私達を一個の独立した存在として捉えてくださるからです。しかし、私達は弱いから葛藤します。サタンや悪霊の方に手をのばす事もあります。サタンや悪霊の方がきれいに美しく装っている事が多いからです。こっちの方がいいよ、楽だよ、みんなが幸せになるよ…と様々なやり方で誘惑します。一人一人の弱点を狙って来るのです。サタンの力は強力です。

内村鑑三の弟子で、太平洋戦争前、東大教授の職を賭して侵略戦争反対を訴えた矢内原忠雄というキリスト教の指導者がいます。彼はこの聖書箇所を取り次いで次のようにサタンの強さを物語っています。「イエスが神の霊をもって世に来たり給うまでは、サタンの権力から人を完全に救い出す者はいなかった。サタンはそれほどに強力に人をとらえて己が支配の下に置いたのである。即ちサタンは人の体を占領してこれを己が屋敷となし、人の心と情を捕らえて己が所有となし、世の欲を城壁として巡らし、脅迫と誘惑を武具としてこれを守った。これによって人はサタンの城たる『罪』の捕虜となったのであり、その上に翻る旗は『死』であった。」矢内原忠雄は時の政権べったりの大学の同僚に讒訴され、職場を追われました。彼は自分を陥れた同僚の中に、侵略戦争を遂行する時代の中に、そして自分の中にサタンの力を感じ、それと戦ったからこそ、その力の強大さが分かったのでしょう。

今日の聖書箇所では、このサタン、悪霊の頭を「ベルゼブル」という名で呼んでいます。実はこの「ベルゼブル」という呼び方は、サタンの本質を描き出す言葉です。「ベルゼブル」という言葉には、「屋敷のあるじ」という意味があるからです。矢内原先生の言葉を借りれば『罪のあるじ』それがサタンという事

になります。そして、ベルゼブルという言葉にはもう一つの意味があると言われて
ています。「蠅の王」。腐ったものにたかり、ぶんぶん、ぶんぶん、うるさい蠅。
私達を罪に縛り付けている正体は、蠅。蠅の大親分がベルゼブル。私達の
心の内に入り込み、
蠅の卵を産み付けて内部から腐らせようとする者達です。なんだあ、蠅かあ…
と思うかもしれませんが、蠅は私達の魂を内側から腐らせるのです。だから命
取りなのです。蠅を喜んで迎え入れる家はないでしょう。私達、色々な誘惑に
負けそうになる時があります。神の国に、主イエスに手をのばすのではなくて、
悪霊の方に手をのばしたくなる時があります。キリストの弱さよりは人の強さを、
キリストの貧しさよりは人の豊かさを、キリストにある孤独よりは人とのつながりを、
キリストの時を待つよりは手っ取り早い効果を、キリストの義よりは自分の義を
求めたくなることがあります。しょっちゅうです。キリストの言葉に反対したくなる
事があります。そんな時、蠅に手をのばしている自分をイメージしたいと願いま
す。憎みたくなる時、やられたらやり返したくなる時、誰かを否定し、自分の立
場を守りたくなる時、誰かを裁いて自分の正義を主張したくなる時、蠅の親分
の方に手をのばして、心の中に大きな蠅、蛆虫の卵をいっぱい抱えた大きな
蠅を招き入れようとしている自分を思い浮かべたいと思います。一匹の蠅が
私達をダメにする、「これくらいはいいだろう」というほんの些細な気持ち、人を
嫉み、人を貶めたり、非難したり裁いたりする些細な言葉、蠅のような言葉が
私達の中で増殖し、蠅の大軍となって私達を腐らせます。だからパウロはテモ
テへの第二の手紙でこのように言っています。「俗悪な無駄話を避けなさい。
何故なら、それはもっぱら不信に邁進する者たちに仕えるもので、彼らの言
葉は骨をむしばむ癌の腫瘍(しゅよう)のように広がるからです。」

9 主イエスは守ってくださる

そして、主はこう仰っています。「強い人が武装して自分の屋敷を守ってい
るときには、その持ち物は安全である。」ここの「屋敷」というのは単語には、「神
殿」という意味もある単語です。また、パウロはこのように言っています。「あな
たがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいること
を知らないのですか。」私達は、その内に神の霊が住んでくださっている神殿
です。そしてその神殿を神の霊ご自身、主イエスご自身が守ってくださってい
ます。主が守ってくださっている間は、私達は安心なのです。しかし、この譬え
のようにイメージするとよく分る事ですが、いくら主イエスが守ってくださって
いたとしても、同じ神殿に住む私達が主を裏切り、敵であるサタンに裏戸を開い
てしまえば、敵が押し寄せくるように、イエスさまに味方しない者は、イエス様
に敵対している…というのはよく分る事だと思います。戦いが激しい時に、中
途半端な日和見的な態度、「あっちもいいけれど、こっちもいい」とするなら、

結局は蠅の餌食です。蠅はイエス様がいない人の心のどこにでも入り込むからです。

その悪影響は私達の内心の問題だけではありません。家族、恋人、友人、共にいる人たち、共同体全体、教会全体に影響します。主イエスが集めてくださった神の民をてんでばらばらに散らす事になるのです。力をもっている牧師や有力教会員が教会を自分のものと勘違いし、人を裁き、傷つけ排除するというのは、私達がよく知っている事です。キリストの体なる教会は深く傷つき痛み、本来救われる筈の人に福音を宣べ伝えることができなくなります。何より何よりキリスト・イエスが深く悲しまれることです。

だからこそ、私達は主イエスの側に着く事ができるように、主イエスの祈りを祈るのです。弟子達が主に「祈りを教えてください」と言った時、主が教えて下さった祈りです。これは主イエスご自身がよくよく祈っておられた祈りであったでしょう。私達も今、再び主の祈りをここで祈りたいと思います。ルカ福音書11:2~4です。「『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」私達が主の祈りを祈り、助けを求めて手をのばす時、主イエスは力強い御手をもって私達をサタンの力から解き放ち、神の国へと伴い行ってくださいます。敵をも赦す神の愛の中に生きる自由を与えてくださいます。それはなにものにも代えがたい喜び、蠅が与える事の出来ない喜びです。主と共に、信仰の仲間と共に、主の祈りをささげつつ、サタンに背を向け、イエス・キリストによってもたらされた神の力強いご支配の内に歩いていきたいと願います。